

<書評>

トリーシャ・ローズ著・新田啓子訳

『ブラック・ノイズ』

(みすず書房、2009年)

小林 憲二

日本でアメリカの大衆文化と関連させて本格的にヒップホップを取り上げて論じた本は決して多くはないと思う。映画の分野ではスパイク・リー監督の『ドゥー・ザ・ライト・シング』(1989年)とか『モ・ベター・ブルース』(1990年)、さらにはジョン・シングルトン監督の『ボーイズ・ン・ザ・フード』(1991年)とか『ハイヤー・ラーニング』(1994年)などが封切られた時、大都会に生息する黒人の若者たちの悩みと生き方に即して、人種と暴力の問題が時事的な話題を提供し、様々に調べられて詳細に論じられたのを記憶している。とりわけこれらの映画に登場していたアイス・キューブというラップ歌手の存在と迫力は、今に至るも鮮明に脳裏へ刻み込まれていると言ってもよいだろう。

だが反面で、2010年を迎えようとしている現在、大型のポータブル・ラジオレコーダーを抱えて街を闊歩する黒人の若者や、画面の外側で早口に捲し立ててラジオからラップ音楽を流すディスク・ジョッキーの声の印象などは、遙か遠い昔に属するといった印象が強い。また、ニューヨークの地下鉄の車両に乱暴に書かれた落書きのことなどは、当時の新聞で「ニューヨーク事情」として何度か取り上げられていたのを微かに覚えているだけである。唯一、ブレイクダンスの影響ということで、最近の映画やTVの画面に出てくる日本の若い男性たちの群舞やステップの踏み方などに、1970年代から80年代に米国で流行っていたス

トリート・ダンスとの繋がりを感じさせられるというのが、私がこれまで培ってきたヒップホップに関する知識と言ってよいだろう。

しかし、この度新たに翻訳刊行された『ブラック・ノイズ』という一冊の本を通読し、いかに私が「アメリカのヒップホップ」について無知であったかを思い知らされた気がしている。ある意味で、映画や文学も含めた「アメリカ文化」に対するこれまでの私の研究姿勢が、やはりまだ書記作用としての活字文化中心に偏していたとの反省しきりである。読み始めの当初は、十数年前の1994年に刊行された原著が、1995年アメリカ図書賞を受賞し、『ヴィレッジヴォイス』紙の年間最優秀図書25冊に選ばれたとはいえ、最先端にあるアメリカの文化現象をどこまで「原理的に」取り込み得ているのか大いに不安を抱いた。「素早い変化」を売りとするアメリカの社会と文化を対象とする限りで、原著の素材や立論は既に「時代遅れ」なのではないだろうかとの予測がなかったと言えは嘘になる。だが、そうした不安や予測は「アメリカのヒップホップ」に対する断片的な知識や生半可な印象に基づく私の側の謂れなき思い込みでしかなかった。つまり、ヒップホップの全体像や個々の作品を知らないことに起因する勝手な「素人判断」だったのである。本書はそうした私の蒙を啓いてくれる原理的な奥行きと、現在なお通用する例証豊かな文化経験に支えられた良書だということを以下で説明してみたい。

ヒップホップに関連して本書の著者がまず強調することは、この新しい文化現象が「時代」と「地域」の特殊性に根差した社会的・政治的な「破壊と抵抗」の緊張関係から生じてきたという事実である。どういうことか。1970年代から80年代にかけてのアメリカでは、産業構造の変化と技術革新と金融部門の集中化が産業の空洞化をもたらし、雇用関係にも多大の影響を及ぼしたにもかかわらず、レーガノミックスに基づく弱者切捨て政策のもとで貧富の差の拡大と巨大都市のスラム化が進行していった。とりわけ、ニューヨークのスラム街では「給与所得で最下層の二十パーセントにいる人々の収入が絶対的な減少を」記したと言われている。この最底辺層に暮らしていたのは、サウスブロンクスやベッドフォード・スタヴェサントやハーレムに住む黒人とカリブ海のヒスパニック系移民たちであった。しかし、この「滅亡と無意味さのヴィジョン」から、サウスブロンクスなどのスラム街に追放された者たちの最も若い世代は、「創造的で戦闘的な自己認識と表現の形式」を作りあげていった。つまり、彼らは「敵意に満ち、先進技術に囲まれた多民族的な都市の土壌で、自分たちの文化的アイデンティティと自己表現の方法を作り変えて」いかざるをえなかったというのであ

る。著者によれば、その活力と創意工夫がヒップホップの表現形式と若者の文化的ネットワークの創出につながっていったという。

その意味で、グラフィティ・ライティング（署名入り落書き）とブレイクダンスとラップミュージックという三つが、アメリカの空洞化した巨大都市の中心部において同時期に発生した同根の文化現象であり、その表現形式に多くの共通点を持つと共に相互交流があったという事実も見過ごすことができない。たとえば、グラフィティ・ライターは、ラップのレコードも出しているし、ブレイク・ダンサー、DJ、ラッパーはまた、グラフィティ風の装飾を施したジャケットやTシャツを着ることが多いという。それだけでなく、ヒップホップ・イベントが通常「三部構成のエンターテインメント」の形をとり、ブレイク・ダンサーとラッパーとDJが同一のステージに立っていたという情報も、私には耳新しいことだった。さらに、この三つのヒップホップの表現形態には、「フロウ（脈絡作り）、レイヤリング（重層性）、ラプチャー（炸裂感覚）」といった形式上の連関が存在しているという。すなわち、「ヒップホップは、視覚、身体、音楽、詩の要素が織りなす一つの連続体を、ある瞬間に突然打ち破る鋭い不協和のフレーズを登場させるが、それでも作品は流れるような躍動とエネルギーを保ちつつ進むようにできている」というのである。

こうしたヒップホップの原理的な構成要素を多少抽象的な言葉遣いで詳細に解き明かした後、著者はなおもこの三つの表現形態に即して各々の歴史的な変遷過程を体験的に跡付けているが、ここでは紙数の関係からラップミュージックに焦点を絞って主要なポイントだけをおさえておくこととする。要は、ラップに籠められた黒人の「音響の力」が、黒人の文化的伝統、脱産業化以後の都市の変容、現代の技術状況の帰結だということだが、著者の説くところに従えば、「サンプリング」に依拠するラップのサウンドは「すでにレコーディングされた音楽を大きく変えるという意味で脱構築的」であると共に、「商業的なゴミ溜めに捨てられた文化的な音新たな意味を得る文脈を作り上げているという点では修復的」でもあるという。つまり、黒人文化の歴史的蓄積を新しい技術的手段を使って書き直し、「ノイズ」と呼ばれつつも同時に共同体の対抗的記憶装置としても機能するが故に、ラップは「何かを呼び覚ましつつ同時に破壊する一撃を持っている」ということになる。

こうしたラップミュージックの特徴を最もよく体现化したものが、麻薬を題材としたパブリック・エネミーの楽曲“Night of the Living Baseheads”と、アイス・キューブをリード・ラッパーとしたNWA (Niggas with Attitude) が警察権

方の暴虐に対して象徴的に挑戦した楽曲“Fuck the Police”や“The Nigger Ya Love to Hate”、さらにはKRSワンの楽曲“Stop the Violence”などである。これらの楽曲を通して著者が浮かび上がらせるラップミュージックの特徴は、「警察や教育システムとのやり取りにおける彼らの側の経験を語り、支配集団との接触を描く」ことで、支配権力の側が樹立している公式トランスクリプトを反転・転覆させつつ、「権力の多様な表れを口うるさく批判し、不服従というイデオロギー的立場を演じる」ことだという。

ここまでの、主に男性ラッパーたちの打ち立ててきた積極的な文化脈絡だと言えるだろう。だが、そこから著者は反転して、男性ラップ歌手の内包する「家父長的な男性優位の姿勢」と、それに伴って露呈されてくる「黒人女性への性的支配と攻撃性」へと批評の矛先を向けていく。言わば、黒人女性をモノ化したりステイタスシンボルとして従属的な場に追いやったりする「セクシズム」の問題である。著者は端的な例証として、ギャングスタ・ラッパーの代表アイス・キューブの場合を持ち出してくる。アイス・キューブは、警察官を殺せと呼びかけた同じフレーズで、どういうわけか黒人女性に怒りを向け、「あばずれ (bitches)」も一緒に殺してしまえと訴えかける。「キューブの歌詞は、黒人男性の権利を剥奪し、抑圧する悪者は、国家権力に係わる者と黒人女性だと」決め付けているというわけである。

しかし、著者は男性ラッパーの作品に現れる「女性への根深い恐れと敵意」には多くの複雑な根拠があるとして、白人フェミニストたちが槍玉にあげる一方的な黒人ラッパーの「男性性批判」とは、あくまで一線を画そうとする柔軟な黒人女性ラッパーの位置も浮かび上がらせていく。そのような黒人女性の「特異な位置」を歌い上げている女性ラッパーとして著者が紹介・分析するのは、“Tramp”や“Shake Your Thang”で知られるソルト・ン・ペパー、あるいは“Paper Thin”のMCライトさらには“Ladies First”のクイーン・ラティーファなどである。

著者は「自立」と新しい「男女関係」を模索する女性ラッパーの代表例としてソルトにそくして、次のように語る。「個人的経験に根ざし、自立と親密性を同時に欲する黒人女性の意識を知っているからこそ、ソルトの歌詞と見解は、現代アメリカ文化における、異性愛女性の自主性と性的欲望の複雑な絡みを語れるのだ。争点はすでに明確である。従来女に押し付けられてきた情緒的な役割を果たそうとする女性は、ますます減っているように見える。だが、そうなったことで結局、男も女もお互いの首を絞めずに済むのだ。」つまり、黒人女性ラッ

パーは男性ラッパーの作品を解釈する枠組みを効果的に変えることによって、彼らとの持続的な対話を可能とし、現代黒人女性による文化生産全体の一大勢力になっていったというわけである。「アメリカ文化のいま」を語るにあたって、本書が重要な提言をなしていると思ふ所以である。

最後に本書の日本語訳のことに触れておきたい。難解な原著の理論構築と現代文化論の詳細をよく読みこなし、平易な日本語に移し変えるという作業は並大抵のことではなかったと思う。しかし、専門家特有の術学趣味に走ることなく、一般読者の誰でもが理解できるように割注などで説明しながら、内容を噛み砕いて本書を楽しく読み進める工夫をしている訳業に対して、私は大いにその労をねぎらいたいと考えている。訳者の努力の大方はその効果をあげていると評価できるからである。